

高校教員

高橋 寛

(56歳・仙台市青葉区)

勤務先の高校でボランティア同好会をつくり、顧問をしている。今年で4年目。ホームレスの人たちへの炊き出しをしたり、震災遺児のため街頭募金を行ったりしている。ボランティアに関わった生徒たちの表情、意識の変化について語ってみたい。

◇

◆

◇

ホームレスの人たちは一般的に「怖い」「汚い」というイメージを持たれがちだ。高校生も例外ではない。だから、初めて炊き出しに参加した時に、生徒たちはショックを受ける。

まず公園に並ぶおじさんたちの数の多さに。次に、何をしたらいいのか聞けずただおろおろしている自分に。おじさんたちの身なりがきれいなことに。女性の方が交じっていることに。忙しいくらい続けざまにショックを受ける。

それが次第に変わっていく。本人にとっては、新しいことばかりがいっぱい。それに慣れてきたところから、次に何をすればよいか、自分で判断するようになる。分からなければ周囲の人に聞く。参加の回数が増すことに、公園に並んでいる人たちから「ありがとう」「おいしいよ」と掛けられる言葉が、忘れられなくなる。

周囲の中で、自分が何をすべきなのかを判断する。初めて会った人たちと協力合って物を作り上げる。炊き出しを受けるため身ぎれいにして公園に並ぶ方たちと接して、社会の現実に触れる。それらのことから生徒たちが学ぶものは、限りなく大きい。

炊き出しボランティア体験を通して、生徒たちは「自分の普段の生活のありがたさ」を口にするようになった。体験が自分の中から言葉を押し出す。体験を積むことにより言葉が本物になる。自身の体験が、いたわりの心を育む。そうして、個人の人生の思考回路に組み込まれていくのである。

◇

◆

◇

震災遺児のための募金活動は昨年5、6月と10、11月、今年2月と3月の末

に行った。

お金を集めて、震災で親を亡くした子どもたいに使ってもらおうと始めた活動だが、実際は難行苦行であった。

雨の日、寒い日が多いせいもあったが、ノルマで決めた2時間半は足を棒にして街頭に立った。グループに分かれての募金活動で、顧問の私は仙台の中心街を自転車で回った。

街の空気というものが、直接飛び込んで来た。生徒はそれを受け止める。10代の声をからした訴え、出会いと触れ合い。生徒たちはうらやましいほどに、街の方たちから応援を受けた。幸せなことだ。募金が終わるころ、ハトハトなのに興奮で顔が上気していた。

募金活動を初めて体験した生徒たちが、次のような感想を報告書に書いた。

「募金活動をして、初めてお金の大切さや重みを学ぶことができました」

「人のためにやっている募金だったはずが、自分が学ぶ活動になりました」

「ボランティアは、誰かのために活動した内容以上に、自分自身が成長するためのよい経験になると思います」

この世代が、ふるさと復興の担い手になるのは間違いない。私たちにはその世代に関わる責任がある。

生徒たちには、二つの体験を通して本物になった自分の言葉を信じて、将来の道を進んでほしい。

(投稿)